

民俗博物館だより

Vol. XI No. 3

1984. 12. 25



▲糸井神社の秋まつり (川西町結崎)

目次

公園・民家そして博物館への雑感(その2)……………	1
祭りの模擬道具(用具)(物質文化⑬)……………	3
カラス餅(大和の民俗行事⑩)……………	5
雨乞い地蔵について(民俗資料調査抄報⑭)……………	6
博物館通信……………	7
お知らせ・他……………	7

公園・民家そして博物館への雑感(その2)

当館編

—入館者からのメッセージ—

民俗公園を訪れ、民家を、そして博物館を見学した人たちの雑感は、すでに紹介したところでもあります(本誌 Vol. IX No. 1)。それ以後も、見学者から新しい雑感=メッセージが沢山寄せられています。この見学者の多くのメッセージから、現在の民俗公園や民家、そして博物館の立場を外からの眼でみた考え方や見方を知ることができるように思えます。そして、多くの人たちの貴重な声を聴きながら一步一步前進していく指標をもちつづけたいと常に考えています。

このような意図で、公園に、民家に、そして博物館に立寄った人々の雑感のいくつかをここに紹介することにしました。

この雑感の紹介にあたっては、前回と同様に、見学者の方々の想うままの気持が文章に表われていることに留意し、原文のまま掲載したことをお断りするとともに、長文に亘るもので一部(前半あるいは後半)割愛したことも併せて、ここに明示いたします。

●昭和59年4月26日、奈良市在住・Aさん
昔の住まいが、そのまま保存されている。それも一ヶ所にこんなにたくさん。静かで落ちついた感じがうれしいですね。静かなふん囲気を大切に。足踏み式のうすときねの復元もいいなあ。何よりもこんな広いすずしい所で一人ゆっくりくつろげるとするのが一番ですね。ポカポカした日にのんびりと、又来たいと思います。

●昭和59年5月20日、上牧町在住・Bさん
わたしは、みんぞくはくぶつかんがすきです。それはむかしの人がつかっていたもの、いえとかがわかるからです。(下略、後半は避雷針のことを明記—编者註)。

●昭和59年8月7日、(住所無記名)Cさん
民俗博物館内のお茶コーナーの茶びつは私の実家のものです。ほんとうになつかしくて写真を何枚も撮りました。今は亡き父と母の

思い出と幼い頃の思い出がよみがえりました。思わず涙が出てきそうな一日でした。

●昭和59年8月30日、神戸市在住・Dさん
きょうはなつやすみのおわりでやぎてきて、ふるいものを見て、むかしの人はこんなところでせいかつしていたんだと思いました。わたしもこんないえにすみたいナ!!

●昭和59年9月15日、奈良市在住・Eさん
3回来ましたが、私達も柳生の田舎育ちで昔なつかしく、いつまでもいつまでも残こしておいて下さい。私達の思い出として、敬老の日、おばあさんのプレゼントで、とても喜ぶこんでくれました。

●昭和59年10月30日、橿原市在住・Fさん
重層で昔の人の知恵があちこちに見られて感心しました。又、なつかしくもなりました。

●昭和59年11月3日、上牧町在住・Gさん
親子4人で初めて訪れました。庭先でお弁当を食べ、煙がたちのぼる矢田山系のすばらしい景色に囲まれたひとときに久々に心のどかな平和な時を持つことが出来ました。奈良(大和)に住んでいて幸福だなあとつくづく思いました。私達夫婦も幼ない時こんな家に多少縁がありましたので、とてもなつかしかった。



▲展示場での見学風景

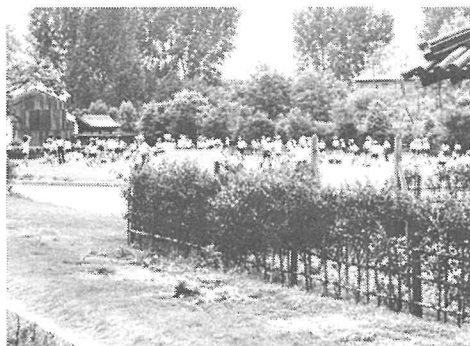
●昭和59年11月3日、(住所無記名)Hさん
なんとなくいなかで帰省したみたいな気持ち
になりました。今日で何回目かな。またきま
す。



▲展示場での見学風景



▲民家の見学風景



▲公園内で集う風景



▲公園の散策風景 (吉野集落への途)

●昭和59年11月4日、(住所無記名)Iさん
田舎のおば様の家を懐かしく思い出されまし
た。都会にはない風情・情緒を感じました。

●昭和59年11月4日、大和郡山市在住・Jさん
大和郡山に転宅して1ヶ月、おとずれたいと
思っておりましたが、本日寄せて頂きまして
田舎がなつかしく思い出されます。友人と又
来たいと思います。

●昭和59年11月8日、安堵小学校3年一組一同
とても古い家の様子がよくわかりました。お
もしろい。

* * *

●昭和59年11月1日付送付、吉野町立中荘小学校
10月30日の遠足の時にけんがくさせていただ
きまして、ありがとうございます。10月31
日に絵をかきました。わたしは、あんなに大き
なたてものだとは思いませんでした。中には
きれいでむかしの物がたくさんおいてあり
ましたね。わたしは、すごびっくりしまし
た。どこであんな物を見つけてくるのですか。
わたしはふしぎです。そしてすらいどは、と
てもくわしく分かりました。(下略)。*

●昭和59年11月7日付送付、奈良市立済美南小学校
11月6日は、どうもありがとうございます。
社会の勉強に役立ちました。スライドをみせ
てくださってありがとうございます。ちょ
っとうるさかったけれどとてもいい勉強にな
ったので社会の勉強がすこし早くなりました。
とってもたくさんむかしのどうぐなどがあ
ったのはいって見たときは人形もいまにも動
きそうだったし、とってもたくさんあった
のでびっくりしました。(下略)。*

※両校の3年または4年の生徒さんから(学
校長経由で)送付いただいた民俗博物館見学
の作文の二つです。両校からこの作文以外に
多数の作文をいただきましたが、両校の代表
として生徒名を明記せずに掲載しましたこと
をお断りいたします。

祭りの模擬農具(用具)

大宮 守人

—その2形態—

奈良盆地中央部は、稲作農耕を主としつつ裏毛として麦・綿などの畑作を並行して行って来た。また奈良盆地周辺部の山沿いの地域や丘陵の間に小盆地が点在する大和高原・宇陀山地・口吉野あたりでは、扇状地に山田が発達し、山の傾斜面には茶作りなどが営まれている。

こうした地形的特色は人々の日々の暮らしぶりに大きな影響を与え続けて来たはずである。

平担部の水田耕作を中心とする地域では、水利に関する諸問題が村落生活の規範にも反映されるであろうし、共同祈願としての祭りの色彩にも現れたであろう。

また山に近い地域では、山での柴取りや成り物の採集、呑み水など日々山から受けるものの他、水田耕作に必要な水源としての恩恵も人々は感じたものと思われる。

こうした中で、前者では「野神祭り」として、後者では、「山の神祭り」として、また山も平担地も両方ある地域では、この両方の要素が見られるというのも自然なことといえよう。

いずれの祭りでも、宮座などの祭祀組織を持ち、頭屋に当たった家が、御供の材料などを準備し、これを習わしのおりに調製して供え、その御供を分けいただいて、人々に幸をもたらす神と共に宴を催すという祭の基本パターンには違いはないといえる。

民間における神祭りの本質を考察する1つ

の手だてとして、こうした祭りの中に現れる有形物(祭具や供物、調度など)の比較によって県内の共同祈願の傾向の一端をとらえ、個々の特質を明らかにする資料とすることも可能と考える。

ここでは、豊穰を願う祭りの中に見られる模擬用具(農具や山林用具)を取り上げ概要を比較してみたいと思う。

県内にみる村落の共同祈願としての祭りの中で模擬用具が登場するものには、「おんだ祭」「野神祭り」「亥ノ子祭り」「山の神祭り」「秋祭り」〔写真1〕があるが、これらの祭りでの現れ方は、実際に農耕のしぐさに使用されるものと、御供などと同じように供え物のごとく扱われるものの2つに分けられる。

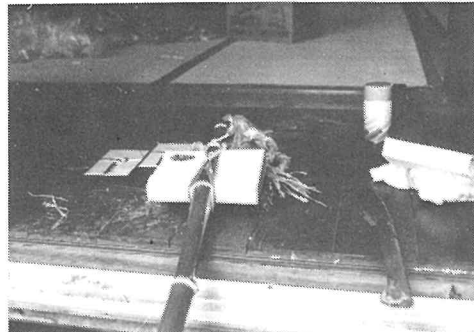
前者は、「おんだ祭」と呼ばれ、1月から6月までの間(2月~3月が最も多い)に行われている予祝儀礼の中で使われる実物大の農具の模型があり、村々の宮の神前で、田植えに至るまでの農耕の所作を演じるのに使われるものである。

これには、^{かすき} 鍬・^{まき} 鋤・^{まき} 犁・^{まき} 耙・^{まき} 杵・種桶・苗籠などの農具があり、鍬先などの鉄製の部分は墨を塗って表現されている。

これらの模擬農具は、神社の拝殿または、四方に青竹を立てて注連縄で区切り新しい砂を敷いた神前の庭上で、作男に扮した村人が農耕の所作を演じ、犁や耙の工程では牛面を被って牛耕の様子までも演じるので実物とほぼ同じ大きさに作られているのが特徴である。



〔写真1〕秋祭りの農具模型づくり(吉野町小名)

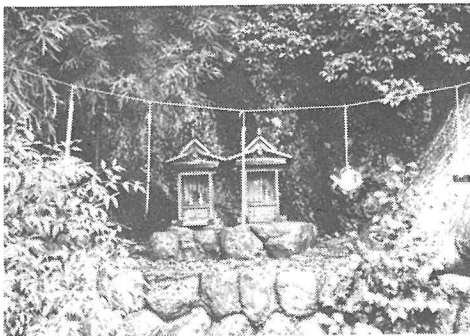


〔写真2〕野神祭りのドサンバコ(田原本町鍵)

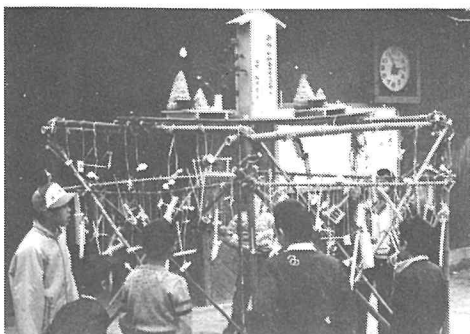
一方、「野神祭り」「亥ノ子祭り」「秋祭り」「山の神祭り」では、実物大のものではなく、祭礼にあたって農具や山林用具のミニチュアが木や竹・茅ガラなどで作られ、御供とともに供えられる。「おんだ祭り」では祭りの用具として毎年同じものが使われ、神社の什器としての性格が強いが、後者では、祭りの都度作り変えられる点が異なる。前者が毎年使い続けられるだけの強度と、しぐさとはいえ実際に使用できる程度の形態をもっているのに対し、後者は、農具などの機能を象徴化したものであり形ばかりのものである場合が多い。

それでも天理市新泉の野神祭りでは、小麦藁で作られた牛に犁と耙を引かせて牛耕の所作が行われ、野神祭りでのミニチュア農具による農耕の所作として県内では特異な例となっている。田植えをひかえた、5月5日または6月、5月前後に行われる野神祭りは、奈良盆地中南部の場合は水の神の象徴である藁の蛇体を持って子供達が村内を練り歩くのが特徴的である。

また、野神祭りで農具模型が登場する例も



〔写真3〕山の神の注連縄（東吉野村小栗栖）



〔写真4〕亥の子祭りの神棚（桜井市高田）

盆地中南部に多く、北部では見られない。盆地中部の礎城郡田原本町鍵では、ドサン箱、（土産箱）〔写真2〕という折箱にクワ・スキ・カマ・ビッチュウ・カラスキ・マグワなどの小模型を入れて青竹の先に挟んで列の先頭を歩き、その年に祝い事のあった家から祝儀を集めてまわる。ドサン箱は野神への土産であり、神に奉る品物を入れた箱と考えられる。

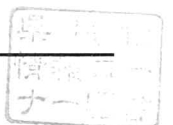
山の神祭りでは、東吉野村小栗栖・同伊豆尾などで見るように、正月7日の祭日にあたって山林用具などを釣した縄を毎年張り替える。鋸・鉋・斧の他、鯛の型・酒入れ・剣が付いている〔写真3〕。桜井市北山の秋祭り（10月28日）でも、手力雄神社の境内の古木2本の間に山林用具付きの注連縄を張る。

桜井市高田の亥ノ子祭りでは、12月1日山口神社の神霊を集荷場前の広場に一間四方の青竹の棚を作って移しその棚の周囲に農具・山林用具・日常生活用具の模型や賽銭を多数藁で釣しておく〔写真4〕。このあと集った子供達がこれを奪い合って持ち帰り各家の神棚に供えておく。

ここでの様々な模型は神に奉る調度としてのものであり、神の御霊が新らたな勢いを得て再生する祭礼の日に、神の威力を充分に発揮していただき、人間もそのお陰を被むりたいために奉るのが、これらの調度といえることができる。この在所の神もこうした用具で農耕を行い、山の手入れをし、日常の生活をするという神観念は古くからのものと考えられる。

こうした神々の調度の典型は、神宮（お伊勢さん）の式年遷宮にあたって、神殿の造替と共に、神のお使いになる衣装・装身具・武具・機織具・楽器など19種の品々を神宝として造進されているという例であろう。

村々の祭神の名前や創始については不明な点も多いのであるが、祭礼に供えられる調度類から土地の人々がこの神に何を期待して来たかということの一端は知り得るのではないかと考える次第である。祭礼における「物」からの考察は別の機会にさらに展開できればと考える。



カラスの餅

浦西 勉

年の暮の餅つきが、寒の頃のオカキつくりの時に、奈良県では、カラス(烏)の餅と言うものを作り、それをカラスに食べさせるという習慣がある。餅をついた時に、平年12個、閏年は13個の小指ぐらいの餅を藁ヅトに入れて、カラスのいそうな木の枝や家の屋根にほうりなげておくと、いつのまにかカラスがくわえてゆくというのである。この時、次のような唱えごとを言うところがあるので、一、二紹介しておこう。

- カラコイ、カラコイ、モチャルゾー 12
 (または13) ノモチハ ワレ(お前)ニハ1ツ
 オイ(おれ)ニハ2ツ ジャクロ3ツト
 カイコトショー(奈良市虚空蔵・菩提山)注①
- カラスコイ モチャルゾ
 石榴3ツト カエテヤル
 啼カンデ啼カンデ 飛ンデコイ
 (吉野山)注②

その他、大同小異であるが何らかの唱えごとをしながら、カラスに餅を与えるのである。もう少しカラスの餅について説明すると、山添村三ヶ谷などでは、藁をたばねて円柱型をした藁ヅトというものを作り、その中へ小さい餅12個(閏年は13個)を入れて屋根へほうりなげると言う。また、桜井市滝倉では二月六日のオコナイの餅つきの時の4回目にカラスの餅とモチバナを作るのが習わしである。このカラスの餅も藁ヅトに入れて木に吊るす(写真)。また、天理市上仁興では、「カラこい カラこい」と言って餅を空中へなげる



▲カラス餅(桜井市滝倉)

とカラスがとんで来てそれをくわえたとも言う。

いったいこのような風習はどのようにして生まれたものであろうか。このカラスの餅についてもう少し詳しく観てゆくと次のような伝承がある。カラスが村へはじめて餅米の種をくわえて来てくれたから(天理市上総)。カラスに早くモチを食べてもらおうと豊作になる。あるいは、早く食べてもらおうと災厄からのがれられる。また、火の神さんだから火難のがれになるなどである。そして、それらの伝承に、必ずカラスは熊野権現の使いであるという話が附随する。一概には言えないけれど、このカラスの餅の風習には熊野信仰が重なっているようにも想像される。江戸時代の辞書で『倭訓栞』には「烏を熊野の神使とする故なり」と記されている。また、享保4年(1719)に作られた錦文流の『熊野権現烏牛王』にも熊野の牛王(注③)のカラスが紙からぬけ出し、主人公を京都まで船で送ったという奇跡が書かれている。熊野三社(本宮、新宮、那智)から発行される熊野牛王は、単に「オカラスサン」とも呼ばれ、中世期には御師、先達、檀那という組織を結び全国各地のあらゆる層の人々に、熊野信仰(熊野牛王を配る)を普及していたようである。この時、年の暮に熊野の牛王札が配られることが多く藁ヅトの中へ入れる餅は、この時のお供えとして、熊野の御師達の来訪にあわせて準備した御供ではなかろうか。カラス餅という風習は、このようなところから生じた行事であろう。

(注)

- ①林宏氏報告『奈良市史・民俗編』
153ページ
- ②岸田定雄氏報告『大和のことば(上)』
74ページ
- ③熊野三社が発行する牛王宝印でカラス75羽で「熊野牛王宝印」と記され護符として古くから使われた。

雨乞い地蔵について

奥野 義雄

今回調査した雨乞習俗の内、雨乞地蔵について紹介することにしたが、この雨乞地蔵に関する事例は県内各地に少なからず遺っている。

たとえば、奈良市北永井町には弘法大師が描いたと言い伝えられている地蔵尊がある。また、下市町惣上にも地蔵尊の石仏が安置されている。

この二例のほかにも、ここで奈良盆地の雨乞地蔵尊の石仏二体を調査事例として次に挙げることにしよう。

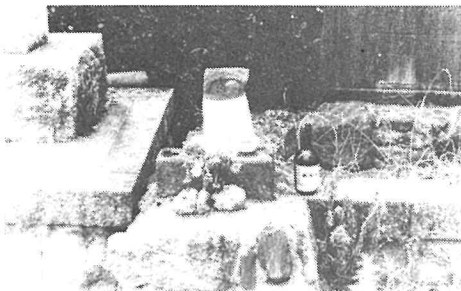
* * *

まず、上牧町五軒屋にある雨乞地蔵尊（石仏）へは、オオヒヤケのとき以外には願い事を行なわないという。一般のヒヤケのときには、村人がワラを持ち寄って、村内の池（バサイケ）まで行ってトンドを行なった。この雨乞祈願を、この五軒屋のムラでは「クモヤキ」と呼ぶということである。

このヒヤケとは異なり、オオヒヤケのときには、石仏の地蔵尊に祈願するのである。この祈願習俗には、県内各地で行なわれてきた



▲雨乞地蔵（上牧町五軒屋）



▲雨乞地蔵（安堵村窪田）

雨乞方法と同様に、村人が地蔵尊をナワで縛って、村内にあるジンデン池（神田池）まで持ち運んで行き、池に漬けると、不思議に雨が降ったという。

この地蔵尊への雨乞祈願は、この祈願の前段には、村人が田圃にある井戸の水を吸み上げて田に水を入れても、さらに水を必要とする段階で石仏の地蔵尊へ雨乞祈願を行なったということである。

この五軒屋のムラにあるいくつかの雨乞習俗の内、地蔵尊への祈願は最終段階の雨乞方法（習俗）であったようである。

次に、この五軒屋のムラの地蔵尊への雨乞習俗と異なる事例として、安堵村窪田（上窪田）の雨乞地蔵尊を挙げることにしよう。この窪田の雨乞地蔵尊も石仏である。この地蔵石仏は、もともとムラの地蔵講の人々が造仏した——一方では地蔵講の講員の一人の有力な有志が造仏したとも伝えられ、この講員の縁者が今でも供花しているともいう——もので、この地蔵尊が雨乞いにご利益があると言われ伝えられてきたという。したがって、かつては村人が、堤にあったこの地蔵尊に雨乞のために祈願したということである。

ただ、この窪田（上窪田）のムラでは、夏場の水の確保には、ムラを流れる佐保川の川水の権利を持っていたため、余り深刻に雨乞祈願をする必要はなかったことも事実であり、雨乞地蔵尊への祈願は、村人全体の祈願とは異なり、村人個々の田圃の水不足の問題であったようにも捉えることができる。

* * *

このように地蔵尊が雨乞祈願の対象として存在する中で、ムラの風土や習慣によって異なる事例や近似する事例などがあつたと想定し得る。この雨乞地蔵尊だけでなく、これ以外の雨乞仏（庚申、阿弥陀など）にみる雨乞習俗の類型的把握を試みることも、雨乞習俗と仏教信仰とのかわりを理解していく手掛りになるのではないかと考えている。

(1984. 8. 24. 丁)

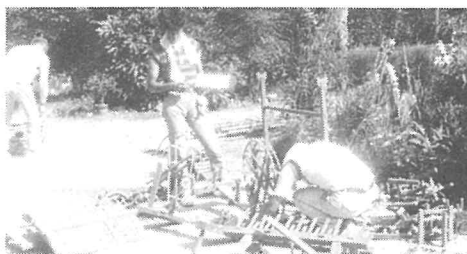


◆ ◆ 博物館通信 ◆ ◆

民俗博物館は、民俗資料を基本の資料として歴史を研究または、学習するところです。歴史を研究（学習）するには、過去に記された記録で行なったり（歴史学）、土中から発掘された考古資料でなされたり（考古学）、民俗資料でなされたり（民俗学）する場合があります。歴史学・考古学・民俗学はそれぞれ得意とするところがあります。民俗学の場合、記録の少ない、地方の郷土研究や、庶民の生活の歴史研究を得意としています。

さて、民俗資料には有形と無形があります。有形の民俗資料は「民具」と呼ばれています。無形の民俗資料は「伝承」と呼ばれています。当館では、有形の「民具」を中心に収集、整理、保存、研究活動を行なっています。無形の「伝承」については、写真、文字記録などによる記録化（資料化）をしています。こうした資料は、私達の過去の暮らし（歴史）を知るためには欠かせないものです。民俗資料は展示、研究、教育などに利用されています。

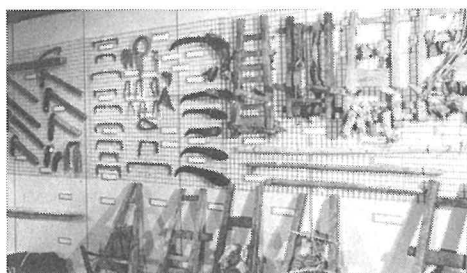
注①昔から民衆が日常生活に用いてきた道具。
注②古くからあった「しきたり」（制度、習俗、信仰、口碑、伝説などの総体）の伝えられた事柄。 (浦西 勉記)



▲ ① 民俗資料の調査収集



▲ ② 整理・保存



▲ ③ 展示・教育・講座・研究

★★★★★ お し ら せ ★★★★★

● 民俗博物館の行事予定

☆59年10月24日～60年3月24日

常設テーマ展「日々の暮らし」

☆59年12月20日～60年3月24日

民俗文化財速報展〈人形〉

★予告

●60年1月26日(土) 体験学習講座 PM1～

〈ワラフゴづくり〉

※体験学習講座ご参加ご希望の方は、講座内容、時間、受付日等々の詳細については当館へお問い合わせ下さい。

●60年3月10日(日)と3月17日(日)に民俗カルチャー講座〈民家コース〉を開催します。

※この講座の詳細は、当館へお問い合わせ下さい。

☆訂正：Vol. XI No.2 の (通巻39号) ➡ (通巻40号)

《表紙解説》 毎年10月22日に川西町結崎の糸井神社の秋祭りが営まれる。この秋祭当日以前、同神社を氏神として祀る村々からトウヤが選ばれ、このトウヤの戸口に神霊が移るオカリヤがつくられ、数日間トウヤは分霊が移ったときから礼拝を怠らざに行なうという。祭礼当日は、各村から神社までお渡りが行なわれ、この行列にトウヤ(子供)が担うウマには、柳の枝に結びつけられた初穂がついていて、収穫祭の様相を呈している。

■ 編集後記 ■

雨の少ない10月末から11月末にかけて、「雨が降るごとに寒さが増す」という気候の移り変わりが薄れ、日があけるごとに寒気がおしよせてくる。いよいよ冬本番へと向う感覚が目安をなくしたような想いで、冬到来の季節を民俗公園の樹木の紅葉から感じとらねばならない12月半ば。

一方、博物館は10月下旬に新しい展示へ衣替えを行ない今日に至っている。小学生の団体、親子連れなどが展示場で昔の用具や道具とコミュニケーションをもつ。そして、生徒同志、親と子などの会話も聞える。「どんなことを」「何に興味を」などと話の内容に関心事が移っていく。 (☆)